NEWSLETTER

2015 年度、2016 年度 研究関連活動報告

2015 年度、2016 年度 外教学会では研究に関連して以下の研究大会、研究会を開催いたしました。いずれの回も授業実践、研究活動にすぐに役立つ内容で「学理と実際との調和」という関西大学の学是を体現する有意義なものでした。今回は、第 10 回、第 11 回の研究大会について報告します。

◆関西大学外国語教育学会 2015 年度 第 10 回研究大会 テーマ「20 年後の外国語教育を見据えて」
日時:2016 年 3 月 5 日(土)13:00～16:30
場所:関西大学 千里山キャンパス 岩崎記念会館 4 階
第Ⅰ部
基調講演 竹内 理先生(関西大学 外国語学部 教授)
「今、日本の英語教育に求められていること―これからの外国語教育の方向性を読み解くために―」
第Ⅱ部
シンポジウム 「私の 20 年後予想」
竹内 理先生 (関西大学 外国語学部 教授)
山崎 直樹先生 (関西大学 外国語学部 教授)
池田 真生子先生(関西大学 外国語学部 准教授)
ファシリテーター
吉田 信介先生 (関西大学 外国語学部 教授)

◆関西大学外国語教育学会 研究会 2016
日時:2016 年 6 月 25 日(土)15:30～
場所:関西大学千里山キャンパス 岩崎記念館 4 階
レクチャー①
「研究不正ということ ～文科省研究不正の対応ガイドラインと関西大学の取り組み～」
講師:関西大学推進部
レクチャー②
「外国語教育研究における倫理的な研究」
講師:名部井 敏代先生 (関西大学 外国語学部 教授)

◆関西大学外国語教育学会 2016 年度 第 11 回研究大会 テーマ「外国語教育と協同学習」
日時:2017 年 3 月 11 日(土)13:30～16:40
場所:関西大学 千里山キャンパス 岩崎記念会館 4 階
実践報告1
「日本人の大学生のための韓国語教育を目指して―歌って覚えるハングル暗記法」
報告者:金 恩慶氏(関西学院大学 非常勤講師)
実践報告 2
「大学におけるコミュニケーション能力向上のための韓国語授業-劇を取り入れたアクティブラーニングの一例」
報告者:権 世美氏(龍谷大学 非常勤講師)
基調講演＆ワークショップ 江利川 春雄先生(和歌山大学 教育学部 教授)
「協同学習によるアクティブな外国語授業作り」

第 10 回研究大会報告
研究大会委員長　竹田　里香

2016 年 3 月 5 日（土曜日）、関西大学外国語教育学会の第 10 回記念研究大会が関西大学千里山キャンパス岩崎記念館において開催されました。今回の研究大会は「新時代の外国語教育」を研究テーマとするシリーズ第 4 弾となり、昨年度の「時代を超えて変わらないこと」に続いて今度は将来に目を向け「20 年後の外国語教育を見据えて」をテーマとしました。研究大会当日は 50 名もの方々にご参加を頂きました。

基調講演には「今、日本の英語教育に求められていること　－これからの外国語教育の方向性を読み解くために－」というタイトルで関西大学外国語学部・大学院外国語教育研究科教授の竹内理先生をお迎えし、ご講演をいただきました。2020 年（平成 32 年）は教育改革の節目の年になり、これからの日本における外国語教育が大きく変わろうとしている。その具体的な改革とこれらのバックボーンになる考え方に言及され、問題点はどこにあるのか、教員はこの状況にどう対応していくべきかなど、フロアーを巻き込んだインタラクティブで緊張感のある基調講演でした。

続くシンポジウムでは、竹内先生に加え、関西大学外国語学部の山崎直樹先生、池田真生子先生にご登壇して頂きました。ファシリテーターとして本学会会長の吉田信介先生も参加してくださり豪華なシンポジウムが実現しました。また、シンポジウムでは会場の皆様の意見が即時に集計されてプロジェクターに投影される機器「クリッカー」も使用し、有意義なシンポジウムとなりました。

「知識・技能の定着」から「思考・判断・表現」の時代へと移りつつあります。教員として児童・生徒・学生にどのような授業をすればそういった力をつけれるのか、私たちも挑戦です。

お忙しい中、ご講演くださいました竹内先生、山崎先生、池田先生に心よりお礼申し上げます。

また、この度、本研究大会の開催にあたり尽力くださいました会長の吉田先生、神道美映子幹事長、並びに学会役員の皆様、そして当日お手伝いを頂きました修了生の皆様に、心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。

第Ⅰ部　基調講演
「今、日本の英語教育に求められていること
―これからの外国語教育の方向性を読み解くために―」
講師：竹内　理先生（関西大学 外国語学部　教授）

竹内先生の基調講演は、ペアワークで参加者の発言を引き出しながら進む参加型の活気のある講演で、気づけば、あっという間に 90 分経っていました。

新学習指導要領が全面的に実施される 2020 年（平成 32 年）は、教育改革の節目の年と言われています。先生のお話は、この改革を前に、教員としてどのような心構えをしておくべきか示唆してくださるものでした。

講演の骨子は以下の3点でしたが、

1）今英語教育の何が変わろうとしているか。

2）変革の中でも教師が心に留めて置くべきことは何か。

3）教員に求められるものは何か。

英語のみならず、他の外国語教育に携わる参加者にも学びの多い内容でした。

1）今英語教育の何が変わろうとしているか。

・英語の捉え方が変わる

認知トレーニング、教養の一つとして捉えられてきた英語がコミュニケーション・ツールとして強く認識されるようになる。

・求められる学力が変わる（学力の3要素）

従来の1）知識・技能の定着に加え、2）思考・判断・表現する力が重視されるようになり、3）主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ力が求められるようになる。

・学習到達目標が変わり、カリキュラムデザインが変わる

小・中・高を通じて一貫した学習到達目標を設定。故に、今後は高校を起点にバックワード・デザイン（逆向き設計）で、教育過程のデザインを考える必要がある。

・評価が変わる

到達目標に CEFR が導入され、評価に Can-do が取り入れられる。（「知っている」から「～ができる」へ）

4技能型外部テストが導入されるようになる。

・授業内の活動に求められるものが変わる

特に中高では、思考・判断・表現を含むコミュニケーション能力が求められるようにな るため、授業内の活動は、「活用力の基礎を培う活動」「使用場面と必然性を大切にした活動」「発信内容を伴った活動」であるようデザインする必要がある。

2）変革の中でも教師が心に留めて置くべきことは何か。

・「英語で授業」はあくまでも原則

これまでの外国語教育学の研究では、外国語教育において母語を排除するのは好ましくないことが明らかとなっている。よって、教室内では学習者が L2 を使用し、教師は L1 と L2 を使い分ける「コードスイッチング」が、正しい在り方だと考えられる。

・動機づけが高い学習者ばかりではない。

ベネッセ教育研究開発センターが中学生を対象に実施した調査（2009）によると、英語が苦手、どちらかというと苦手とする中学生は、回答者の 43.9％。このように必ずしも動機づけの高い学習者ばかりではない現状で、教師　が心に留めて置かなければならないことは、動機づけ・動機維持の対策である。

3）教員に求められるものは何か。

・新たな形態の授業を展開する授業力（アクティブラーニング、プレゼンテーション、討　論、交渉など）」

・上記を英語で展開できる高度な運用能力（英検準 1 級または TOEFL iBT 80 以上）

・プロフェッショナルとしての知識と気概

「確かな授業力」、「高度な外国語運用力」、「プロとしての知識と気概」、これは英語教育のみならず、全ての外国語教育に携わる教師に求められるものであり、身の引き締まる思いがしました。

（文責：戎　妙子）

第Ⅱ部　シンポジウム「私の 20 年後予想」

竹内 理先生　（関西大学 外国語学部 教授）
山崎 直樹先生　（関西大学 外国語学部 教授）
池田 真生子先生　（関西大学 外国語学部 准教授）
ファシリテーター
吉田 信介先生　（関西大学 外国語学部 教授）

山崎先生、池田先生が、シンポジウムでのお話の内容を原稿にまとめてくださいました。世界が異質のものに対する寛容さを失いつつある今、非常に重要な視点を提示いただきました。
先生方お忙しいなか、ありがとうございました。

特別寄稿 「20 年後の外国語教育はどうなっているか」

山崎 直樹先生

このお題に対し 4 つの予測をした。若干の参考資料とともに以下に示す。

1) 学校という制度の中で或いは教室という場所で外国語を学ぶことの不適切さが立証され、その外で外国語を学ぶのが主流になる。

学校という制度の中で外国語教育をより良いものにしようと奮闘している人は、学校制度が外国語教育を悪いものにしている可能性を考慮してみる必要がある。外国語学習のみに関係する資料ではないが、学校という枠の外での学びを考えるのに、[a][b][c]が参考になる。

2)「異文化間能力」は、今は外国語教育との関連で取りあげられることが多いが、将来は外国語教育と関係なく教育されるようになる。

異文化との出会いにおける自己の内面への省察については[d]が参考になる。また、[e]（第 1 章）は「外国語の能力は必ずしも必要でないが異文化に対処する能力が必要な人」の例を挙げている。この視点は、興味深く、上述の「将来は外国語教育と関係なく教育される」はここから思いついた。

3) 同一クラス内であっても学習者の認知特性に合わせた学習法を選択することが推奨され、アウトプットに関しても認知特性に合わせた方式を選ぶことが認められるようになる。種々の発達障碍に合った学習法も発達し、障碍に合ったアウトプットも認められるようになる。

[f]で述べられている「認知特性」はどこまで確かなものかはわからないが、今後、効果的な学習法を考える際には、このような視点は無視できない。

4) 学習のための言語活動を「1: 言語構造の理解と産出＞2: 言語形式の機能を訓練＞3: 社会的に容認される言語行動を訓練＞4: その言語を使用するコミュニティにおいて成果物を得る」のように低次の段階から高次の段階に進むものと考えたとき、低次の段階しか教えられない教師は機械に取って代わられる。

上述の 1-4 へと進む言語活動のモデルは[g]の精神に則ったものである。また、[e]の中では「これからの日本語教育は社会における「実質的な行動」を取り入れた教育でなければならない」という主張がなされていて、これも興味深い。「低次の段階しか教えられない」云々については、[h]に述べておいた。

【参考文献】

[a]「ビーラボ（b-lab）文京区青少年プラザ」http://b-lab.tokyo（2016.5.31 確認）
[b] 上田信行(2013).『プレイフル・ラーニング』. 東京: 三省堂.
[c] 中牧弘允・森茂岳雄・多田孝志(2009).『学校と博物館でつくる国際理解教育』. 東京: 明石書店.
[d] “Autobiography of Intercultural Ecounters” http://www.coe.int/t/dg4/autobiography/default_en.asp（2016.5.31 確認）
[e] ネウストプニー, J.V.(1995).『新しい日本語教育のために』. 東京: 大修館書店.
[f] 本田真美(2012).『医師のつくった「頭のよさ」テスト～認知特性から見た6つのパターン』. 東京: 光文社.
[g]「外国語学習のめやす」http://www.tjf.or.jp/meyasu/（2016.5.31 確認）
[h] 山崎直樹(2015).「自然言語処理技術の発達が外国語教育にもたらすもの」,『漢字文献情報処理研究』, Vol.16, pp.6-16.

特別寄稿 「私の 20 年後予想」

池田 真生子先生

20 年後を予想する前に、過ぎし 20 年を振り返ってみたい。20年前といえば、ちょうど電子メールや携帯電話が世に出回り始めた頃で、Wi-Fi や電子タブレットもなかった。研究面では、電子ジャーナルもなく、文献取り寄せは専ら他大学の図書館へ出向いたり、数週間の取り寄せで書籍や雑誌の実物を取り寄せたりしていた。外国語学習でも、VOA など短波放送を苦労して聞いたり、英字新聞を自費で購読したりして、学ぶ材料を入手しようとしていた。

現在は、外国語学習でも以前と違ってネット上でさまざまな教材を手軽に入手できるようになった（それもフリーのものが多数）。しかしながら、それらをフル活用し、自己調整学習を満喫している学習者は少ないのではないだろうか。大学や英会話教室などの授業に出席して「なければ」という環境なしには、なかなか学習が継続しないようだ。いわば、self-regulated ではなく other-regulated な学びと言えよう。それほど、人同士のつながりが学習の継続において大切なのかもしれない。おそらくこれは、情報化が進めば進むほど重要になるのではないかと、考える。

これからの 20 年は、過去 20 年以上のスピードで変化するだろう。特に情報化は、昨今よく耳にする AI や IoT が常態化するかもしれない。自動翻訳技術も進み、世の半数近くの職がロボットに変わられるとも言われており、時代の変化に対応しない教員もそこに含まれると言われている。

けれど、教育で求められるものは、情報化の変化ほど大きく変わることもないように予測する。たとえ自動翻訳が進んでも、機械を通さず人が自身で言葉を伝えることの重みには、取って代われない。南アフリカ共和国の元大統領ネルソン・マンデラ氏（1918-2013）が、生前残した、

”If you talk to a man in a language he understands, that goes his head.

If you talk to him in his language, that goes to his heart.”

というメッセージのように、機械を挟んでの会話と、本人から直接話される言葉での会話とでは、人間関係の深まり方が代わるはずである。

コミュニケーション・ツールとしての教育目的が残る以上（いや、たとえ残らなかったとしても）、20年後の外国語教育には、コミュニケーションの礎を教えるという大きな使命があると、筆者は考える。それは、自分とは異なる相手を享受する態度を育成することである。言葉は、思考と言われている。学習を通して外国語そのものや異文化を知ることで、人は、複眼的思考が可能となる。すると、相手の立場になって考え、相手を受け入れる態度を持つことができるようになるだろう。つまり、20 年後の外国語教育にも、平和教育へと繋がる大切な使命があると信じている。

第 11 回研究大会報告
広報委員長　戎妙子

2017 年 3 月 11 日（土曜日）、関西大学外国語教育学会の第 11 回記念研究大会が関西大学千里山キャンパス岩崎記念館において開催されました。

今回の研究大会のテーマは「外国語教育と協同学習」で、第 10 回の研究大会に続き、学校教育が大転換期にあるなか、「21 世紀型の授業」を深く探究する目的でこのテーマとなりました。

基調講演には、「学びの共同体」研究会のスーパーバイザーであり、協同学習を核とした授業改善の指導助言のため、全国を飛び回っていらっしゃる和歌山大学教育学部教授の江利川春雄先生をお迎えしました。先生には協同学習の基本的な考え方を紹介いただくとともに、様々なアクティビティーを通して、私たち参加者自身が協同学習を体験させていただきました。

実践報告1では、関西大学大学院外国語教育研究科の修了生で、現在関西学院大学で韓国語教育に携わっている金恩慶先生が、歌を使った入門期のハングル文字指導の実践を報告してくださいました。また、実践報告2では、龍谷大学で韓国語教育に携わっている権世美先生が、劇を取り入れた韓国語指導の実践を報告してくださいました。

一つの研究大会で片や英語教育、片や韓国語教育と、異なる言語教育に触れることができるのは、本学会ならではの取り組みだと思います。お忙しい中、講演をお引き受けくださった江利川先生、ならびに惜しみなく実践を報告してくださった金先生、権先生はもとより、本研究大会の開催にあたり尽力くださった竹田研究大会委員長ほか研究大会委員の皆さん、会長の吉田先生、神道幹事長に心より感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

最後になりましたが、本大会にお越しくださいました参加者の皆様に、実行委員一同、厚くお礼申し上げます。

第Ⅰ部　実践報告

実践報告Ⅰ
「日本人の大学生のための韓国語教育を目指して
―歌って覚えるハングル暗記法―」
講師：金　恩慶氏（関西学院大学　非常勤講師）

実践報告Ⅱ
「大学におけるコミュニケーション能力向上のための韓国語授業―劇を取り入れたアクティブ・ラーニングの一例―」
講師：権　世美氏（龍谷大学　非常勤講師）

今回、両先生は大学で第二外国語として韓国語を勉強している学生に対する授業での実践を報告してくださいました。金先生は韓国語初学者、権先生は初級を終了した段階の学生と対象こそ異なりましたが、共通する点は、如何にして学生の動機づけを高め、それを維持させるかということだったように感じました。

＜金先生の実践報告＞

外国語の勉強を始めた時、まず学習者を悩ませるのが、その言語特有の文字表記法と発音ではないでしょうか。最初の段階でその習得に躓くと、後の学習にも大きく影響を及ぼします。韓国語は語順が日本語と似ていることから、日本人には習得しやすい言語だと言われることがあるようですが、ハングル文字と独特の音の習得は一筋縄ではいきません。そこで、金氏は、自身が韓国で日本語を学んだ際に出会った「ひらがな連想暗記法」にヒントを得て、独自にハングル連想法を開発。母音・子音別に絵文字入りの暗記シートを作成して少しでも記憶に残るよう工夫されているとのことでした。他にも、学生に馴染みのある歌の替え歌に指の動きを合わせて文字を覚える方法を、実際の動画を交えて紹介してくださいました。楽しそうに活動に取り組んでいる学生さんの姿が印象的でした。

＜権先生の実践報告＞

権先生は、韓国語の初級を終えた段階の学生を対象に、実践的コミュニケーション能力を高めることを目的に、「アクティブ・ラーニング型の授業」として劇を取り入れた二つの事例を報告してくださいました。事例1はタイトルとセリフを教員側で提示し、セリフを覚えさせて劇を完成させた例で、事例2はタイトルからセリフまで学生側で決めて劇を完成させる例でした。二つの事例を比較すると、事例2の教師の干渉のないほうが「自分が知らない知識をグループ活動を通して得られた」「教科書で習う以上に実用的な韓国語を覚えられた」「みんなと仲良くなった」といった感想が寄せられ、教育的効果のみならず、学習者同士の絆を深めることができたと、劇を取り入れた授業の有用性を分析されていました。報告の最後に、今後の課題としてグループ活動をどう評価するか、その難しさを挙げられましたが、評価の在り方は今後「協同学習」を進めていく上で、避けて通れない重要な要素だと改めて感じました。

（文責：戎妙子）

＜金 恩慶先生　と　権 世美先生＞

第Ⅱ部　基調講演＆ワークショップ
「協同学習によるアクティブな外国語授業づくり」

講師：江利川 春雄先生（和歌山大学　教育学部　教授）

今回のご講演のテーマは「協同学習によるアクティブな外国語授業づくり」であり、江利川先生はワークショップ形式で、協同学習とは具体的にどのようなものか、また協同学習において大切なことは何かをご紹介くださいました。

文科省が目指す主体的で対話的な深い学びのために近年注目されているアクティブ・ラーニング（AL）は「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称（文科省『用語集』より）」です。江利川先生は協同学習をその AL の最高段階と定義されました。

協同学習を実践することで得られる効果には、人間関係や学力の向上、問題行動の減少等があるといいます。実際のデータでも、英語嫌いが加速する中、英語が好きと回答した生徒は AL であるほど好きという結果が出ています。また学力の向上に関しては、特に応用問題において劇的な向上が見られたそうです。その一方で、協同学習は教師にとっても生徒にとっても慣れない授業スタイルであるが故に、切り替えや習熟が困難であるという問題点もあります。その解決のため本講演では、以下に示すような、協同学習を行う際のいくつかのポイントや工夫を、我々フロアに体験させることを通してご教示くださいました。

まず、協同学習を行う上で何より大切なのは、「学び」の土俵づくりです。ワークショップでは自己紹介を行った後、右隣の人の良いところを褒める「チームづくり活動」を行いました。このように互いを認め合うことや、活動が終わるたびにハイタッチをすることを通して、絆ホルモンであるオキシトシンが増え、その後の活動がスムーズになるそうです。

次に、グループ活動ではもたれあいやタダ乗りが起こらないよう、メンバー全員に役割を分担することが大切であるとおっしゃいました。活動後の発表でも発表者が偏らないよう、全員が少しずつ話したり、発表者を順に回したりという工夫が必要であるそうです。

そして、協同学習で取り扱う課題は「基礎的な共有の課題」と「高度なジャンプ課題」で構成することが大切です。共有の課題においては、習熟度の低い生徒はモデルとなる生徒が目の前にいることから学び、習熟度の高い生徒は低い他人に教えることから学ぶというしくみが働きます。また、ジャンプ課題においては、ワクワクドキドキハイレベルを合言葉に、面白いトピックを選び、制限時間を設けて、どの生徒にとっても一人では解決するのが難しい課題を設定することが大切であるとおっしゃっていました。

今回のご講演およびワークショップで実際に協同学習を体験することで、まさに百聞は一見に如かずということわざ通り、その魅力や可能性を感じ取ることが出来ました。1時間半という時間が本当にあっという間に過ぎ、フロアの誰もがもっと先生のお話を聞いていたいという気持ちになったと思います。

外国語教育に携わるものとして、常に生徒のことを第一に考え、彼らの主体的・対話的な深い学びを目指し、私達自身も学び続けていこうと強く誓うきっかけとなった学会でした。　（文責：鎌田 理星）

—「i（愛）がなければ Eigo は Ego になってしまう」—

自分の偏差値だけに執着させる英語教育ではなく、「学び愛」によって心と心がコミュニケートし合う英語教育をめざそう。（by 江利川先生）

学会からのお知らせ

【研究会 2017　開催】

テーマ:外国語教育　新たな教育方法論

開催日時：6 月 18 日（日）１０：００－１２：３０

＜１０：００－１０：３０　ワークショップ＞
「実際に使ってみよう！語彙学習に Kahoot!」
講師：松原万里子氏
（大阪教育大学大学院教育学研究科英語教育学専攻 Microsoft Certified professional）

＜１０：４０－１１：１０　実践研究報告＞
「パラフレーズ翻訳（PT）ーTILT（Translation in language Teaching）実践の一提案」
報告者：　ラムスデン多夏子氏（京都産業大学外国語学部非常勤講師）

＜１１：２０－１２：３０　講演＞
「関西大学の教養英語教育改革
―応用通訳翻訳学の視点から見た英語教育方法論の新たな展開―」
講師：染谷泰正先生（関西大学 外国語学部・関西大学大学院外国語教育学研究科 教授）

2016 年度の役員は以下の通りです。
2017 年 6 月 18 日（日）研究会の後に学会総会を予定しています。学会の活動に興味のある方、是非メンバーに加わって一緒に活動してください。

役　職				
名誉会長	齋藤　栄二 教授			
会　長	吉田　信介 教授			
総務委員会	近藤　睦美*	入江沢 竜	森岡 千廣	
財務委員会	名部井　敏代 教授*	高 英麗	岩田 弥生	森元 靖
研究大会委員会	竹田　里香*	鎌田 理星	田中 絵理佳	松井 椎
広報通信委員会	戎　妙子*	山本 祐太	中村 あずさ	
紀要委員会	山中　由香*			
監　査	山崎　直樹 教授			
幹事長	神道　美映子			

*印は委員長

＜編集後記＞

デジタルに移行したことで気が緩み、Newsletter の発行が大幅に遅れてしまいました。申し訳ありません。早々に原稿を寄せてくださった、先生方、委員会の皆さまに心よりお詫び申し上げます。

運営委員に新しいメンバーが加わり、外教学会にも新しい風が吹いてくれることに期待大です。